

原著

「おむすびころりん」の変容

— 1960年までの作品を中心に —

佐々木 由美子¹⁾・相澤 京子²⁾

A Study on the Transformation of “Omusubi Kororin” :
An Analysis of Literary Works for Children between 1920 and 1960

Yumiko Sasaki¹⁾ and Kyoko Aizawa²⁾

要 旨

昔話と保育の関わりは、幼児教育の始まりからみられる。昔話のなかでもよく知られている「おむすびころりん」は、全国的に分布している昔話「鼠浄土」に影響を受けて誕生したと推測される。『昔話事典』等には、「おむすびころりん」の項はなく「鼠浄土」の項で、「幼児向けには「おむすびころりん」の話としてよく普及している」とのみ言及されている。「おむすびころりん」は、いったいつ頃から「幼児向け」として、「おむすびころりん」になっていったのだろうか。管見で最初期にみられる「おむすびころりん」は「コロリン爺さん」である。これは東京女子師範学校附属幼稚園で実際に語られ、幼児に喜ばれたお話を集めたお話集『幼児に聞かせるお話』（1920）に収録されたものである。その後「おむすびころりん」は、「幼児向け」として普及するまでの過程で、どのような変容をとげてきたのだろうか。本論では、1920年から60年までの作品を分析し、その一端を明らかにした。

キーワード：昔話の変容、幼児教育、お話

1. はじめに

1) 問題の所在と目的

時代を超えて伝承されてきた昔話は、耳で聞いてわかりやすく、幼い子どもから大人までが楽しめるような豊かな物語性をもっている。また、困難や失敗を乗り越えていく知恵や勇気、物事の道理や真実が凝縮されている。昔話が早くから保育に取り入れられ、子どもたちに語られてきたのも自然な流れであったと思われる。実際、昔話と保育の関わりは、

幼児教育の始まりからみられる。

1875（明治8）年に開設された東京女子師範学校附属幼稚園（以下附属幼稚園）の保育項目は、物品科、美麗科、知識科の3科からなり、この科目の下にさらに「形態ノ置キ方」「形態ノ積ミ方」などの恩物のほかに「唱歌」「遊戯」「説話」など25項目があり、幼児にお話を語ることは「説話」に位置付けられていた。しかし、幼稚園開設当初は、現代のように子どものための物語や絵本が身近に豊富にあったわけではない。

1) 佐々木由美子 東京未来大学こども心理学部 (Tokyo Future University)

2) 相澤 京子 フェリシアこども短期大学 (Felicia College)

倉橋惣三・新庄よし子（1930）は、当時の様子を次のように述べている。「説話には参考保育書がごく少ないので、開園当初、幼児に聞かせる話の材料なり方法に執て、保姆は相當の苦心を要したことと思はれる。ただ「幼稚園記」に掲げられたことを参照して、自らその方法を會得するより外は無かつたやうである」¹。創作児童文学の出現も明治20年代のことであり、恩物など参考資料が豊富で使用方法が明確なものとは異なり、幼児にどのようなお話を、どのように語っていったらよいのか、保育者は試行錯誤のなかおこなっていたのである。ここで記述されている『幼稚園記』とは、1876-77（明治9-10）年にかけて、附属幼稚園の初代監事（園長）であった関信三によって翻訳された幼児教育の手引書で、原著者は「ダウエイ」とある。アメリカのニューヨーク師範学校において、フレーベルの幼児教育を公立学校に導入する目的でテキストとして採用されたもののようである²。その『幼稚園記』には説話に関して次のように記されている。「此書ニ記載スル小説ハ其數多トセス是レ教師タル者事ニ當テ意ノ如ク新小説ヲ假説シ得ヘキヲ以テナリ」³。すなわち、ここで紹介しているお話が少ないのは、保育するに当たって、保育者自身が新しい物語を創作していくべきだからだというのである。たしかに、『幼稚園記』に紹介されているのは、18話のみである。「渴鳥遂ニ水ヲ得ル」「山羊橋上ニ靜闘ス」「驕兎却テ亀ニ後ル」など、イソップ寓話と思われる話のあらすじが、ごく簡単に記されている。

このように手探り状態で始まった幼児のためのお話も次第に充実していく。1906（明治39）年の附属幼稚園の「保育要領」には、32のお話が組ごと（一ノ組・二ノ組・三ノ組）に掲載され、グリム童話やイソップ寓話に加え、「桃太郎」「舌切り雀」「浦島太郎」など、現代でも知られている日本の昔話が散見される⁴。

幼児にお話を語ることの大切さについて、倉橋惣三（1916）は、次のように述べている。

『お話』が幼児の爲に如何に幸福なる世界であり教育上如何に貴重なる材料であるかは、更めて説くまでもない。之れは古く古くから世界のあらゆる國に於て行はれて來た、最も自然的にして最も普遍的なる最古の幼児教育法の一つであるのみならず、近年に於て、更に新らしい注意と研究とが喚び起されて更めて教育的價值と必要とが高唱せられて來た問題である⁵。

幼稚園開設当初とは異なり、子ども向け雑誌やお話集も増えていくなか、附属幼稚園では、どのようなお話が子どもに喜ばれるのか、どのようなお話が子どもにふさわしいのかを模索し続けていた。その成果ともいえるのが、1920（大正9）年に出版された『幼児に聞かせるお話』であり、その続編とも言える『幼児の楽しむお話』（1927年、いずれも日本幼稚園協会編）である。これらは、共に附属幼稚園において、実際に幼児に語られ、幼児を楽しませることができたお話を集めて編集されたものである。倉橋惣三（1927）は、大人が良かれと思って選んだものであっても「幼児の喜ばないお話は落選である」とし、「此集は、此の意味で入選したものばかりを集めたのである」⁶と述べている。

さて、その幼児に喜ばれたお話ばかりを集めたお話集『幼児に聞かせるお話』のなかに「コロリン爺さん」という作品がある。「コロリン爺さん」は、「コロリン」という言葉からも推測できるように、現在、「おむすびころりん」として広く知られている話である。

「おむすびころりん」は、全国的に分布している昔話「鼠浄土」に影響を受けて誕生したと推測される。『昔話事典』等には、「おむすびころりん」の項はなく、「鼠浄土」の項で、「幼児向けには「おむすびころりん」の話としてよく普及している」⁷とだけ言及されている。つまり「おむすびころりん」は「鼠浄土」と同一話型であり、「鼠浄土」の幼児版が「おむすびころりん」であるというのである。

「鼠浄土」とは、地下にあるネズミの樂園を訪ね、財宝をもらってくる話である。山や畑に行った爺が、

弁当の団子、あるいは握り飯、餅などを食べようとして穴に落としてしまい、それを追いかけるうちに爺もネズミの世界に転がり込んでしまう。地下の世界ではネズミたちは餅をついて爺をもてなし、土産に宝物をもたせる。それを羨ましく思った隣の爺が、真似をして地下の世界にいくが、欲張ったために散々な目にあう。同系統の昔話に「地蔵浄土」や「団子浄土」があるとされ、さまざまな類話も存在する。「地蔵浄土」は、地下世界で出会うのはネズミではなく地蔵であり、地蔵の助言により富を得る話で、「団子浄土」は「鼠浄土」が笑い話化したものとされる。「鼠浄土」は、室町時代の御伽草子「鼠草紙」のなかにも、ネズミが歌いながら餅をつくといったモチーフの一部がみられ、古くから語り継がれてきた昔話であるのは間違いない。

では、「おむすびころりん」は、いったいいつ頃から「幼児向け」として、「おむすびころりん」になっていったのだろうか。現状、文献では先述した「コロリン爺さん」以前の作品をみつけることができない。また、「おむすびころりん」についての先行研究も、授業実践等しかみられず、その発生や由来について言及しているものはみられない。

「おむすびころりん」は、「幼児向け」として普及するまでの過程で、どのような変容をとげてきたのだろうか。本論では、その一端を明らかにしたいと考える。

2) 研究方法

「ころりん」「ころころ」「ねずみ」「おむすび」「おにぎり」「浄土」をキーワードとして組み合わせて検索した結果、560作品が抽出された。ただし、「鼠浄土」に関しては、おむすびを転がす場面が登場せず、作品名も異なるため除外することとした。今回は、1920年から1960年までの40年間に刊行された絵本、紙芝居、お話集、絵雑誌、74冊を対象とした。そのうち、「おむすびころりん」というタイトルであるものの、物語の展開がまったく異なる作品等を除外し、実見できた64冊を分析対象とした。作品一覧は巻

末に示す。

なお、本研究に関しては、文献研究が中心となるため、倫理的配慮の手続きは含まれない。そのため倫理的配慮の記載はしていない。

2. 「おむすびころりん」の変容

分析の結果、40年という期間の中においても、作品世界の変容がみられた。ここでは、1920年から1940年代までと、1950年以降から1960年までの2期にわけて、その特徴と違いを述べていくこととする。

なお、引用作品の出典は括弧内に、巻末の作品番号とあわせて作品タイトルを示す。

1) 1920～1940年代まで

(1) 繰り返しの多さ

この時期の作品の特徴として、まず繰り返しの多さがあげられる。もともと昔話は、3回の繰り返しや、同じ場面は同じ言葉で語る等、マックス・リュティのいう「固定した公式」をもっている⁸。たとえば、「桃太郎」でも、鬼退治に向かう道中、犬、サル、キジと出会い、そのつど「桃太郎どん、桃太郎どん、どこへいくのですか」「鬼ヶ島へ、鬼退治にいく」「お腰のものはなんですか」⁹という同じやり取りが3度繰り返される。こうした傾向は昔話全般にみられる。

しかし、この期の「おむすびころりん」は、特に繰り返しが多い。おむすびを転がす行為を中心に繰り返しがみられるのだが、まず、穴におむすび以外のもの、つまり、落とすものの種類を変えることでの繰り返しと、おむすびを転がす行為が1日だけでなく、日をまたいで2日、3日と繰り返される傾向がみられる。

まず、落とすものを変えることによる繰り返しの例では、おむすびだけでなく、手近にあるものを穴に落としている作品がみられる。たとえば、「コロリン爺さん」での繰り返しは以下の通りである。

〈資料1〉

おむすびは、畠の隅の小さな穴へ、「おむすび、

コロリン、スツテンデン、」と云つて、落ちて行きました。(中略) お爺さんは、小石を一つ拾つて、その中へ落して見ますと、別に何とも云ひません。今度は、「ぢや、もう一つ、おむすびを入れて見やうか。」と残つたおむすびを落しました。すると、やつぱり、「おむすび、コロリン、スツテンデン」と落ちて行きます。(中略) 今度は、腰の煙草入れを投げ込みますと、「煙草入、コロリン、スツテンデン。」と云ひます。次に、手拭を取つて投げ込みますと、やつぱり「手拭、コロリン、スツテンデン。」と、落ちて行きます。お爺さんは、面白くてたまりません。着てゐる着物、履いてゐる草鞋、なんでも持ち物は、残らず穴の中へ投げ込んで、見ますと、其度に、コロリン、スツテンデンと云つて、穴がだんだん大きくなりました。そこで、今度は、お爺さんが、この洞穴へ、自分でとび込む事にしました。(中略)「お爺さん、コロリン、スツテンデン。」(作品1『幼児に聞かせるお話』1920 pp.397-399)

ここでは、最初に落としてしまったおむすびのあと、小石(声が聞こえない)→おむすび→煙草入れ→手ぬぐい→着物・草鞋・持ち物→お爺さん、という繰り返しがみられる。身の回りのものを次々と穴に落としていくので、必然的に繰り返しが多くなっている。

穴に落とすものの組み合わせは、①おむすびのみ、②おむすびと重箱(もしくはおむすびを包んでいた竹の皮)、③おむすび・煙草入れ・手ぬぐい・着物や草鞋など身の回りのもの、の3種類がみられる。最も多いのは①のおむすびのみの繰り返しで、次いで②、③の順である。今回の調査においては、③のおむすび・煙草入れ・手ぬぐい・着物や草鞋など身の回りのものは、民主保育連盟編による『子供に読んで聞かせるお話の本 春の巻』(1950 作品18)を最後に、その後はみられなくなり、後述するように繰り返し自体が減少していく。例外が、教育技術

連盟編の『童話と物語による道德教育の実際』(1958 作品54)である。そこでは、おむすび→たけのかわ→ふろしき→ぼうし→おじいさん、の順番に穴に落とされている。手ぬぐいや煙草入れに変わって、「ふろしき」や「ぼうし」など、昭和20年代当時の子どもたちにとってもなじみやすいものになっているのがわかる。

次に、日をまたいで、おむすびを落とす行為の繰り返しについては、2日にわたって繰り返される作品(作品6、8、9)と、3日にわたって繰り返される作品(作品3、4、5、16)が存在する。この時期においては、3日にわたって繰り返される作品の方がやや多いが、1950年以降は、2日にわたって繰り返される作品は若干みられるものの、3日にわたる作品は、ほぼみられなくなっていく。

日をまたいで繰り返される作品に特徴的なのは、おむすびを転がす行為の繰り返しに加え、おじいさんとおばあさんのやりとりが繰り返されることである。1日目、お弁当をすべて穴に落としてしまったため、お腹をすかして帰宅したおじいさんは、その晩、おばあさんがびっくりするほどたくさんご飯を食べ、明日はもっとたくさんのおむすびをつくってくれるように頼む。翌日、再び、その大量のおむすびをすべて穴に落とし、さらに翌日はもっとたくさんのおむすびをねだるのである。以下は、おじいさんとおばあさんのやりとりである。

〈資料2〉

「まあ、お爺さんはどうしたんですね、今夜は大變御飯が進みますね。」「この頃はどうか。御飯が進むやうになつたよ。お辦當もあれ位ぢやしやうがないから、もつと澤山つめておくれよ。」(中略) あくる朝お婆さんはいつもよりも澤山おむすびをつめてやりました。「いくらお爺さんだつて、こんなに食べられますまいよ。」「なに、まだ足りない位だよ。」(中略)「お爺さん今日のお辦當はみんなあがつたのですか。」「みんな食べても、まだ足りなかつたよ。」

明日からはもつともつと澤山つめておくれ。」(中略) あくる朝になると、お婆さんは一昨日よりも昨日よりも、もつともつと澤山のおむすびをつめて上げました。「お爺さん、重くて持てない位ですよ。これをみんな食べたからお腹がさけてしまひますよ。」「なに、これ位何でもない。まだ足りない位だ。」(作品5『童話教材と其の活用』1929 pp.270-272)

たくさん食べるお爺さんを微笑ましく思いながらも、食べ過ぎを心配するおばあさんと、もつともつと、たくさんのおむすびをせがむ、おじいさんのやりとりがユーモラスに繰り返されるとともに、二人の仲睦まじい姿も表現されるのである。

(2) 歌の役割

では、おじいさんは、なぜおむすびを転がす行為を執拗に繰り返したのだろうか。歌が聞こえてきたあとのおじいさんの言葉をひろっていくと、一つには穴から歌が聞こえてくることに対する物珍しさや面白さに惹きつけられたことが理由としてあげられる。

〈資料3〉

「ははあ。いい音ぢやなー。こりやあ面白い。もう一つ投げ込んでみやう。…ポイ。」

おむすびコロリン、おむすびコロリン、コロリンコロリン、スットントン。

「ははあ面白い面白い、もう一つ、ほら。」(作品6『実演・幼児へのお話』1932 pp.196-197)

さらに、この時期の作品に特徴的なのは、面白さだけにとどまらない歌の呪術的な力である。

〈資料4〉

①おぢいさんは そのこゑをきくと うつとりと なんともしへぬ よい氣もちになつて、しごとの つかれも すつかりなほつてしまひま

した。

「いいこゑだ いいこゑだ。身も心も とろけてしまひさうだ」(作品4『二年生の童話』1928 上p.60、下p.67)

②ほんたうに、きれいなきれいなその聲を聞いたかと思ふと、お爺さんは氣がせいせいして、今迄の疲れてゐたのも、すつかりなほつてしまひました。お爺さんは、ほんたうによい氣持になつてもうお辦當を食べることなど忘れてしまひました。(作品9『幼児のためのお話 上』1937-38 p.313)

③おじいさんは、「おむすび、ころりん」の歌を聞いているうちに、すつかりいい氣持ちになつて、われをわすれておどり出しました。(作品14『天狗の羽うちわ：日本童話名作集』1948 p.113)

歌を聞いたおじいさんは仕事の疲れもすつかり癒え、心も晴れ晴れとし、いい氣持ちになっている。そして、その不思議な歌に魅入られたかのように、自分が食べることも忘れて、無心に穴におむすびを落とし続け、あるいは我知らず踊り出してしまうのである。歌に不思議な力がこもっており、その歌の力によって、通常とは異なる状態になったおじいさんは、地下の世界という異界に入り込むのである。

(3) ネズミの歓迎とおみやげ

穴の中の世界は、ネズミの国あるいは村である。後半の作品では、ネズミではなく、ウサギが登場する作品も少数だがみられる(作品39、41、58)が、やはりネズミが最も多い。しかも、神のつかいとされる白ネズミが登場する作品も目立つ(作品3、4、5、9、16、20、22、32、33、44、50、57、61)。地下の世界で、おじいさんはネズミたちから歓待を受けるのだが、特徴的なのが「お餅の曲搗」芸(作品3 p.639)つまり、踊りながら餅をつく「餅つき踊り」

が披露されることである（作品3、4、5、7、10、14、16、19、24）。

〈資料5〉

五色の着物を着て、桃色の切れで頬かぶりをして、杵をかついだ鼠どもが踊りながらやつて来ました。臼のすえてある所へ来ると、鼠どもは臼のまはりをまはりながら、飛んだり跳ねたり、杵を持ちかへたり、まはしたりして、たがひちがひにぺつたんぺつたんと搗き始めました。手がへしするものも亦飛んだり跳ねたりして、面白い手つきで、隙を見てはすばやく餅をかへします。時々お餅を上の方へ投げ上げては、臼の中へうまく落とすこともあります。その間外のもは絶えず聲をそろへて歌つてゐます。（作品3『世界童話大系16』1924 p.639）

しかも、この不思議な餅つきでは、つき終わった後に、臼から金や銀もとびだしてくる作品もある（作品3、5、7、14）。

〈資料6〉

鼠がペツタラ ペツタラ搗くたびに臼の中から、金貨や、銀貨や、お着物や、帽子や、キャラメルや、チョコレートや玩具がザクザク出て来ます。（作品7『幼児童話の話方と実例』1935 pp.253-254）

そして、おじいさんがいとまを告げると、ネズミたちは、おみやげをもたせてくれる。おみやげで最も多いのは、なんでもほしいものをだしてくれる小槌である（作品1、2、3、4、5、10、11、12、13、17、19、20、24、26、27、29、31、32、36、37、38、40、47、49、55、57、61、62）。前半の作品においても後半の作品においても、小槌は満遍なくみられる。次いで、お餅（作品4、15、22、33、34、39、41、51、56、58、59）だが、お餅をお土産にもたせてくれるのは後半の作品に多くみられる傾向に

ある。そのほか、この時期の作品では「大きな銀の玉」（作品6、8）や「黄金白金」（作品14）がある。

では、おみやげにもらった小槌からおじいさんとおばあさんが出すものはなんだろう。

「ごちそうや着物、大きな家」のほか、「若返り」などもみられるが、特筆すべきなのは、「赤ちゃん」、それも男の子の赤ちゃんである。以下のその例をあげる。

〈資料7〉

- ①「お婆さん若くなれ、お爺さん若くなれ。」と言ひながら、勢よく振りました。（中略）
「今度は何を出さうね。」「子供が一人もないから、かはいいい男の子を出さうぢやありませんか。」（中略）
「かはいいい男の赤ちゃん出ろ。」（中略）
「小じんまりした丈夫な家出ろ。」
（作品3『世界童話大系16』1924 pp.643-644）

- ②「じいさん ばあさん わかくなれ」こづちをふると、たちまちに、二人は若くなりました。「こんどは何を出しましょう」「かわいい赤ちゃんでろでろほい」おぎゃあおぎゃあと なきながら、とびだした おとこの子。「こんどは、りっぱな家でろほい」
（作品16『こども世界』4（3）1949 p.47）

また、小槌ではなく「大きな銀の玉」をおみやげにもらう作品もあるが、そこでも銀の玉が自然に割れ、なかから「マルマル太つた男の子」（作品8『実演童話第1集』1937 pp.73-74）が生まれてきている。子孫繁栄や子宝思想が反映されていると思われる。

2) 1950～1960年まで

（1）物語構造の単純化

1920年から1940年代の作品をみてきたが、この期間の「おむすびころりん」には次のような物語構造がみられた。

①おじいさんとおばあさんの登場→②おじいさんが仕事にでかける→③お昼になったのでお弁当を食べようとして落とす→④穴から声が聞こえる→⑤繰り返し落とす→⑥おじいさんが穴に落ちる→⑦地下の世界で歓待をされる→⑧おみやげをもらって帰宅する→⑨おじいさんとおばあさんが幸せになる→⑩隣のおじいさん（あるいはおばあさん）が真似をして酷い目にあう。

一方、1950年以降の作品の特徴として、こうした物語構造の一部が省略されるなど、物語構造の単純化があげられる。具体的には、①おじいさんとおばあさんの登場と②おじいさんが仕事にでかける場面がどちらもない作品がみられる（作品22、25、26、36、42、43、45、47、48、52、55、57、60、63）。また、前半の作品では特徴的だった⑤繰り返し落とす場面が減少し、それに伴い④穴から声が聞こえる描写のない作品もみられるようになる（作品29、30、44、45、60）。⑩の隣のおじいさんが真似をして酷い目にあうのは、昔話では「隣の爺型」と呼ばれる話型だが、前半の作品においても、後半の作品においても1割程度しかみられなかった。

たとえば、①②がなく③お昼になったのでお弁当を食べようとして落とす場面から始まっている作品は以下のようにみられる。

〈資料8〉

①しょうじきな おじいさんが、山で、あなの中に おむすびを おとしました。

（作品43『たのしい一年生』1（3）1956 p.14）

②むかし。おじいさんが、山の はたけで、おむすびを たべて いました。

（作品47『日本むかしばなし（一年の学習文庫4）』1957 p.30）

これに伴い、前半の作品ではおじいさんとの仲睦まじい姿が描かれていたおばあさんが全く登場しない作品もみられるようになった（作品25、26、30、

34、35、36、42、43、45、48、52、56、57、63、64）。

前半の作品には特徴的だった繰り返しも減少傾向となり、資料9のように、複数のおむすびを一度に落としたり、おむすびを追いかけたおじいさんが穴の中に瞬く間に落ちたりと物語がスピーディーに展開されている。

〈資料9〉

①うれしく なって おじいさんは、みんなあなの なかへ おとして やりました。

（作品49『講談社の年齢別絵本』1958頁なし）

②（転がったおむすびの）あと おいかけしておじいさんも、あなへ すっとな ころりんこ。

（作品60『小学館の幼稚園』12（7）1959 p.39）

これらの物語構造の単純化には、前半の作品にみられた昔話の語り口からの逸脱が影響している。後半の作品は、絵本や絵雑誌の割合が増加するため、物語の展開が視覚的に表現されるようになった。これにより、言葉を中心に子どもを物語の世界に引き込むありようとは異なる方向へと展開していると考えられる。

（2）歌の役割の変化

先述したように、1920～1940年代の作品では穴から聞こえてくる歌に対して、おじいさんが物珍しさや面白さを感じるだけでなく、不思議な力、すなわち呪術的な力が認められた。一方、1950～1960年の作品では歌のリズムや調子のよさが強調されるようになり、おじいさんが歌に魅入られる描写はみられなくなる。

例えば、「おむすび コロコロ／コロリン／ストントン。」と聞こえた歌を「ひょうしづいたうた」とあるとし、おじいさんは「これは、おもしろい。」とおむすびをもう一つ落としている（作品58『日本の民話（世界児童文学全集13）』1959 pp.237-238）。こ

の場面からは歌の呪術的な性格は感じられず、リズムの面白さがおじいさんの好奇心を刺激していることが読み取れる。

「おむすびころりん」の中で繰り返される歌について、この物語の再話をしている有吉佐和子（1960）は「この童話の生命は、随所に出てくる「おむすびころりん、すっとなん」とのリズムだ」とし、このリズムが物語の魅力になっていると指摘している¹⁰。この言葉からも明らかなように、「おむすびころりん」が読み手を惹きつける大きな要因はこの歌の軽快なリズムだと言える。

（3）子どもへのまなざし

この時期の作品には読者である子どもの視点にたった描写が顕著にみられるようになる。

例えば、おじいさんが穴の中でご馳走を食べるだけではなく、ネズミたちとなわとびで遊び、「いっしょに あそぶの うれしいな。」というおじいさんの心情が描かれる（作品45『よいこ』1（1）1956 p.27 図1）。



図1 ネズミとなわとびをするおじいさん（『よいこ』1（1）1956 p.27 作品45）

この作品では、おじいさんの喜びが「財宝」をもらうことではなく、子どもが共感できる「友だちとの楽しい時間」や「遊び」になっている。そして、おじいさんとネズミたちが「もてなされる側」と「もてなす側」から「一緒に遊びを楽しむ仲間」に関係性が変化していることが読み取れる。これはネズミたちがおじいさんを穴の外まで見送っている絵が描かれていることから言える。このような描写によって、子どもは物語に親しみを抱きやすくなると考える。

その傾向がさらに進んだのが、主人公が「おじい

さん」ではなく「ぼうや」になった作品である（作品63『よいこ』5（1）1960）。この作品では、ぼうやはネズミのごちそうを食べた後、「みんなで あそぼう。ねずみの「こをとろう」をしてあそぼう。」とネズミたちを遊びに誘う。この描写は、ぼうやとネズミたちが「一緒に遊びを楽しむ仲間」として描かれていることを示している（図2）。物語の結末も特徴的であり、ぼうやは「おかあさん、ただいま。あなの なかの ちゅうちゃんの おうちへ いったきたの。」（p.22 図3）と、あたかも友達の家に遊びに行ってきたかのように母親に報告している。



図2 ネズミたちと子とろ子とろをするぼうや（『よいこ』5（1）1960 p.21 作品63）



図3 母親に迎えられるぼうや（『よいこ』5（1）1960 pp.22-23 作品63）

この作品のように、子どもが主人公になることによって、読者である子どもが物語に自己を投影しやすくなると考える。また、なわとびや子とろ子とろなど、子どもたちにとって身近な遊びが取り入れられている点と、ネズミたちとの関係性が変化している点にも注目しておきたい。

さらに、1950～1960年の作品では、おみやげとしてもらった小槌から出てくるものが、ごちそうや若

返り、赤ちゃんなどではなく、子どもたちが喜ぶお菓子や玩具へと変化している作品もみられる（作品31、36）。

〈資料10〉

きんじょの こどもたちを みんな よびました。おじいさんは、「そら でろ、そら でろ。」と、こずちを ふって、みんなに おかしとおもちゃを わけましたとさ。

（作品31『小学館の幼稚園』7（9）1954 p.20）

この作品では、おじいさんが小槌をふり、近所の子どもたちにお菓子やおもちゃを分け与える様子が描かれている（図4）。そのほか、絵の中にチョコレートやクッキーなどの洋菓子が登場する作品もある（作品36『幼稚園ブック』7（6）1955 p.16 図5）。このように、この時期の作品には子どもの視点に寄り添った描写が増えている。



図4 おじいさんが小槌をふるとお菓子やおもちゃが出てくる（『小学館の幼稚園』7（9）1954 p.20 作品31）



図5 おじいさんが小槌をふると洋菓子が出てくる（『幼稚園ブック』7（6）1955 p.16 作品36）

3. おわりに

本研究では、1920年から1960年にかけて出版された「おむすびころりん」を分析対象とし、その変容について考察した。

「おむすびころりん」は、おむすびを転がすことによって成立する話である。その意味では、「鼠浄土」と密接な関連が指摘されているものの、豆や団子等、おむすび以外でも話が成立する「鼠浄土」とは明確な線引きが可能である。つまり、「おむすびころりん」は独自の歩みをしてきたともいえる。

倉橋惣三は「幼児の喜ばないお話は落選である」と述べているが、管見で最も古い「おむすびころりん」が、幼児に喜ばれたお話ばかりをあつめたお話集『幼児に聞かせるお話』（1920）に掲載された「コロリン爺さん」（作品1）であったことは、その成立過程を考えていく上で意義深い。

1940年代までの「おむすびころりん」には昔話の特徴である繰り返しや、子孫繁栄を象徴するような結末がみられた。しかし、1950年代に入るとこれらの要素は次第に薄れ、物語全体が簡略化されていく。また、主人公を幼児にするなど、より「幼児向け」に再話された作品がみられるようになる。歌の役割も呪術的な性格から単にリズムを楽しむものへと変化がみられた。1940年代までの作品は、言葉で語る要素が強かったが、1950～1960年の作品になると、物語はより視覚的な要素を強めたと考えられる。これは、1950～1960年の作品の約4割が絵雑誌であることが大きな要因だろう。第二次世界大戦中に休刊・廃刊していた絵雑誌は戦後復刊されると、戦前の流れを引き継ぎ、お話や童謡、遊びや生活習慣など、多彩な内容を盛り込んだ総合保育雑誌として刊行された。つまり、1冊の中で手軽にさまざまな世界に触れ、楽しめることを目指した結果、いかに少ない言葉で、いかに子どもを楽しませるかという方向での変容がみられたのではないだろうか。

「おむすびころりん」は、江戸時代以前から口承で伝えられてきたと推測される。しかし、明治以降

の昔話の再話に大きな影響を与えたとされる巖谷小波の「日本昔噺」シリーズには「おむすびころりん」はもちろん、関連の深い「鼠浄土」を含めて収録されていない。そのため、主に民衆の間で語り継がれてきた可能性が高いと考えられるが、この点については今後も継続して調査を行う必要がある。

今後は、1960年代以降の作品分析を行うとともに、各時代の社会背景や幼児教育との関連性についても合わせて考察していきたい。

- 1 倉橋惣三・新庄よし子（1930）『日本幼稚園史』臨川書店 pp.208-209
- 2 浦田まり子（1972）「明治期におけるフレーベル紹介」『東京女子大学附属比較文化研究所紀要』33 p.19
- 3 関信三（1876）『幼稚園記』1 東京女子師範学校

16丁オ

- 4 文部省（1979）『幼稚園教育百年史』ひかりのくに p.956
- 5 倉橋惣三（1916）「水田氏著『お話の研究』を讀みて」『婦人と子ども』16巻7号 pp.290-291
- 6 倉橋惣三（1927）「序」『幼児の楽しむお話』日本幼稚園協会編 p.4
- 7 稲田和子（1977）「ねずみじょうど 鼠浄土」『日本昔話事典』弘文堂 p.713
- 8 マックス・リュティ、小澤俊夫訳（1969）『ヨーロッパの昔話』岩崎美術社 p.59
- 9 小澤俊夫（1995）『日本の昔話3 ももたろう』福音館書店 pp.16-17
- 10 有吉佐和子（1960）「おむすびの味」『講談社の絵本 ゴールド版39 おむすびころりん』講談社 見返し

「おむすびころりん」作品一覧

番号	作品名	シリーズ・収録書	作者	画家他	出版社	出版年
1	コロリン爺さん	幼児に聞かせるお話	日本幼稚園協会 編		内田老鶴圃	1920
2	お結びコロリン	母のお伽噺	大井冷光		冷光遺著刊行会	1921
3	おむすびころりん	世界童話大系 16	松村武雄		世界童話大系刊行会	1924
4	おむすびころりん	二年生の童話（学校家庭学年別模範児童文庫）	梅田寛 等編	黒崎義介	大阪宝文館	1928
5	おむすびころりん	童話教材と其の活用：低学年教育、尋常第1学年	五味義武 等著		南光社	1929
6	お爺さんころりん	実演・幼児へのお話	東京幼児童話聯盟 編		東京幼児童話聯盟	1932
7	お結びコロリン	幼児童話の話方と実例	内山憲堂		東洋図書	1935
8	お爺さんコロリン	実演童話、第1集	鹿児島県女子師範鹿児島県立第二高等女校友会		鹿児島県女子師範・鹿児島県立第二高等女校友会談話部	1937
9	おむすびころりん	幼児教育全集 第3巻 幼児のためのお話 上	霜田静志 編		刀江書院	1937-38
10	オムスビコロリン	児童文学讀本、1学年	日本児童文学協會 編 吉松祐一		有精堂書店	1939
11	オムスビコロリン	日本ムカシバナシ（講談社の繪本；195）	松村武雄	吉澤廉三郎	大日本雄辯會講談社	1941
12	おむすびころりん	国引：童謡集	北原白秋		帝国教育会出版部	1943
13	コロリンじいさん	幼稚園お話集、下篇	日本幼稚園協會		フレーベル館	1948
14	握飯ころりん	天狗の羽うちわ：日本童話名作集	松村武雄		アテネ出版社	1948
15	おじいさんころりん	こどものまど4（1）	中尾彰		新子供社	1949.1
16	おむすびころりん	こども世界4（3）	いえはるよ		実業之日本社	1949.3
17	おむすびころりん	こどもクラブ5（5）	徳永すみこ	河目悌二	大日本雄弁会講談社	1949.5

番号	作品名	シリーズ・収録書	作者	画家他	出版社	出版年
18	おむすびころりん (日本昔話)	子供に読んで聞かせる お話の本・春の巻	民主保育連盟, 児童文 学者協会 共編 西山敏夫	立石鉄臣 等	羽田書店	1950
19	おむすびころりん (日本)	お話十二月: 世界童 話の泉・10月 - 12月 の巻	小出正吾 編著	太田大八	実業之日本社	1950
20	おむすびころりん (むかしばなし)	小学二年5 (5)	大木雄二	竹原聖千	二葉書店	1950.5
21	おむすびころりん	日本昔話 (世界名作童 話全集: 13)	坪田譲治 編著	鈴木寿雄	講談社	1951
22	おむすびころりん	小学館の幼稚園3 (10)	檜葉勇	鈴木壽雄	小学館	1951.1
23	おむすびころりん	よいこ・二年生2 (9)		石田英助	集英社	1951.12
24	おむすびころりん	講談社の絵本 55	坪田譲治	河目悌二	講談社	1952
25	おむすびころりん	幼稚園ブック4 (12)	大木雄二	鈴木寿雄	学習研究社	1952.12
26	きんたろう うしわ かまる おむすびこ ろりん	小学館の幼年絵本 9		黒崎義介	小学館	1953
27	おむすびころりん 日本伝承童話		中村小坡	井口文秀	藤下書房	1953
28	おむすびころりん: 日本昔話	児童文庫; 第9巻 第 7号	カバヤ児童文化研究 所 編		カバヤ児童文化研究 所	1953
29	おむすびころりん	鶴書房の愛児えほん	前田松雄		鶴書房	1954
30	おむすびころりん	ひかりのくに9 (12)	伊勢次郎	鈴木未央子	ひかりのくに	1954.12
31	おむすびころりん	小学館の幼稚園7 (9)	小林純一	鈴木寿雄	小学館	1954.12
32	おむすびころりん	講談社のたのしい絵本	平井芳夫	石井健之	講談社	1955
33	おむすび ころりん	心のともしび 1年生 (新しい学習文庫)	池田宣政 著	いわさきとし かつ	ポプラ社	1955
34	劇あそび おむすび ころりん: 日本昔話 より	たのしい遊戯会	安田浩 編		白眉音楽出版社	1955
35	おむすびころりん	たのしい劇あそび	落合聡三郎, 周郷博 共編 小池タミ子	藤田桜	フレーベル館	1955
36	おむすび ころり ん: 日本昔話	幼稚園ブック7 (6)	蘭あぐり	鈴木寿雄	学習研究社	1955.5
37	おむすびころりん: 日本伝承童話		中村小坡	井口文秀	日本画劇	1956
38	おむすびころりん	たのしく話せる1 (日 本むかしばなし)	西山敏夫	川本哲夫	池田書店	1956
39	おむすびころりん	日本むかしばなし 三年 生	藤沢衛彦・奈街三郎 共編	斉藤としひろ	宝文館	1956
40	おむすびころりん	日本のむかし話 1年生 (学年別幼年文庫1)	大木雄二 編著	鈴木寿雄	偕成社	1956
41	おむすびころりん	日本むかしばなし宝玉 集下巻	児童文学者協会編 よしざわひさこ		宝文館	1956
42	おむすびころりん	よいこのくに (がっけ んのえほん) 5 (2)	大木雄二	井江春代	学研教育みらい	1956.5
43	おむすびころりん: 日本むかしばなしえ ばなし	たのしい1年生1 (3)	坪田譲治	黒崎義介	講談社	1956.11

番号	作品名	シリーズ・収録書	作者	画家他	出版社	出版年
44	おむすびころりん	あそび 10 (11)	早川元二 編集指導	井江春代	静岡福祉事業協会	1956.11
45	おむすびころころ	よいこ 1 (1)		藤井千秋	小学館	1956.12
46	おむすびころりん	まほうのつえ (学年別・名作ものがたり 二年生)	村岡花子	川本哲夫	ポプラ社	1957
47	おむすびころりん	日本むかしばなし (一年の学習文庫 4)	佐藤義美	藤井千秋	学習研究社	1957
48	おむすびころりん： にっぽんむかしえばなし	たのしい一年生 2 (6)	坪田譲治	鈴木寿雄	講談社	1957.4
49	おむすびころりん	講談社の年齢別絵本 5～6歳	平井芳夫	石井健之	講談社	1958
50	おむすびころりん	教室の民話 初級用	民話の会 編 すずきときこ	箕田源二郎 等	国土社	1958
51	おむすびころりん	日本むかしばなし (なかよし絵文庫 16)	浜田広介	黒崎義介	偕成社	1958
52	おむすびころりん	1年の学習 12 (1)	大木雄二	井江春代	学習研究社	1958.2
53	おむすびころりん： 絵話	たのしい幼稚園 14 (1)	坪田譲治	鈴木寿雄	講談社	1958.4
54	おむすびころりん	童話と物語による道徳 教育の実際：小 1	教育技術連盟 編 磯部忠雄		小学館	1958
55	おむすびころりん	キンダーブック：観察 絵本 13 (9)	野田たかし	鈴木寿雄	フレーベル館	1958.12
56	おむすびころりん	あそび 12 (12)	早川元二 編集指導	佐藤ひろ子	静岡福祉事業協会	1958.12
57	おむすび ころりん	1年のおはなし教室： 国語編 (小学 1 年生学 習絵文庫 6)	新川和江	鈴木未央子	小学館	1959
58	おむすびコロリン	日本の民話 (世界児童 文学全集 13)	藤沢衛彦 編	賀川孝	あかね書房	1959
59	おむすび ころりん	おはなし読本：学年別 童話集 1 年生	日本児童文芸家協会 編 にしはら・こう	渡辺鳩太郎	東光出版社	1959
60	おむすびころりん	小学館の幼稚園 12 (7)	岡本良雄	黒崎義介	小学館	1959.10
61	おむすびころりん	講談社のたのしい絵本	与田準一	林義雄	講談社	1960
62	おむすびころりん	講談社の絵本ゴールド 版 39	有吉佐和子	川上四郎	講談社	1960
63	おむすびころころ： 日本名作	よいこ 5 (1)		せおたろう	小学館	1960.4
64	おむすびころりん： 日本昔話	めばえ 3 (5)	川西千保子	黒崎義介	小学館	1960.8

(ささき ゆみこ・あいざわ きょうこ)

【受理日 2025年11月19日】